ソクラテスの弁明［簡易版］

大庭　好喜

目次

1　裁判の様子 1
２　裁判を終えて 9

1　裁判の様子

アテネのみなさん、今の私（ソクラテス）に対する訴えを聞いてどのように思いましたか。彼らの話し方はとてもかろやかで、私さえも我を忘れていつのまにかその話に引き込まれてしまうほどでした。しかし、みなさん、だまされてはいけませんよ。その話の中身はすべてうそです。たとえば、私が言葉を巧（たく）みに使って人をだましたと言っていますが、そのようなことを私は今まで一度だってしたことはありません。第一、私の話を聞いて、私が人を言葉でだませるほどの雄弁家（ゆうべんか）だと思う人など一人もいないと思います。

私は、今年で７０才を超えました。この年になって初めて法廷（ほうてい）という場で話をすることになったのです。私はこの場所において使わなければならない言葉など何も知らないので、普段使う言葉で話をすることしかできません。そのことを十分承知（しょうち）したうえで、どうか今からの私の話を聞いて下さい。私に対する判決は、私の話の内容だけで判断して行ってください。お願いします。それでは今から私への訴えに対する弁明を行います。

私に対する訴えには、はるか昔からずっと私に対して言われ続けてきたものと、最近になって新たに言われ始めたものとの二つがあります。まず、前者、つまり昔から言われ続けてきた訴えに対する弁明から行います。

その訴えの内容とは、「ソクラテスは、悪いことを善いことだと言って人をだます人間だ」とか「ソクラテスは、神を信じない悪いやつだ」というものです。私は、この訴えに対しては、すごく恐れを感じています。なぜかというと、このうわさはあなたがたの多くが小さかった頃から言い続けられてきたことだからです。あなたがたが影響を受けやすい幼いころから何度も何度も聞かされ続けてきて、あなたがたはそれが当然正しいことだと洗脳（せんのう）されているのではないかと心配するからです。そのうえさらにこのことは、誰がどんなきっかけで言い出したことか分からず、それが間違いだと言うことを証明するのに私はどのようなことをすればいいのか全く見当がつかないからです。

それはともかくとしてまず、この訴えが書かれた訴状（そじょう）の代表的な部分を読み上げてみましょう。「ソクラテスは不正を行い、無益なことを行う。彼はいろいろなことを探究しているが、実際は悪いことをねじまげて、善いことだと言って、意図的（いとてき）に人々を間違った方向に導いている」と、このように書かれています。

ところで、アリステファネスという喜劇作家は、ソクラテスを「空を飛べると自分で言いふらしているうそつきな人間だ」と書いています。ただ、これは小説の中での創作（そうさく）であり、文学作品として語られたことで、たとえうそであっても許されること

です。しかし、そのことが真実だとしてこの訴えに書かれていることには驚かされます。私がそのようなありもしないうそを実際に言うことなどあるはずがありません。そんな人間でないことは、私と実際につきあい、話をした人なら誰でも分かっているはずです。それがうそでうわさにすぎないことを、どうぞ本当のことを知っている人がいるのならみなさんに話してあげて下さい。

また、「ソクラテスは、人々に教えまわっては謝礼金（しゃれいきん）を要求している」というのも全く事実ではありません。なにも私は私以外の人が、謝礼金をもらって人々に教えることを悪いことだと言っているわけではありません。事実、そういう人々の中には立派な人もたくさんいます。しかし私は、自分はお金をもらってまで人に教えることのできる力を持ち合わせているとは思っていません。だから、人にお金を要求したことなど一度たりともありません。

それなら、みなさんの中には、「いったい、ソクラテスはどんな仕事をして生活費をかせいでいるのか。あなたのこの悪い評判はどこから起こったのか。もし、ソクラテスが普通の生活をしていたらこんな訴えなんて起こるはずがない。どうかちゃんと説明してくれ」という人も多くいるではないでしょうか。その疑問についてお答えしましょう。今からお話しすることには、ひょっとしたらみなさんは大きな怒りの感情をいだかれるかも知れませんが、どうか最後まで静かに聞いてください。

みなさんの疑問に対する答えとは、一言で言えば、私が人間としてひじょうに賢いからこれらの悪い評判が生じたということなのです。私が賢いということは、デルフォイの神の神託（しんたく）で下されたことですので間違いなどではありません。

実は昔、私の友人がデルフォイの神殿の巫女（みこ）に「この世にソクラテス以上に賢い人間はいるのか」と尋ねたそうです。するとその巫女は「ソクラテス以上に賢い人間はこの世にいない」と答えたとのことでした。これはうそではありません。このことを証明する人間は、ほかにもたくさんいます。私は、彼からそのことを聞いて驚きました。全くと言っていいほど賢くもない私を、なぜ神は最高の賢者であると言ったのであろうかと。しかし、神がうそを言われるはずがないので私は最高の賢者なのであることは間違いありません。そこで私は次のような方法を思いつき、この神のお告げが真実であるかどうかを確かめてみることにしました。その方法とは、この世の中で今、賢者と呼ばれている人々のところを訪ね、自分より賢いかどうかを確かめるということです。

まず私は、多くの人々から賢者と言われている、ある有名な政治家のもとを訪れました。そして、彼と対話してみました。なるほど多くの人が賢者と呼ぶだけのことはあって、彼は数多くの知識を持っていました。また、彼自身も自分を賢者であると信じているようでした。しかし、私には彼が賢者であるとは思えませんでした。それで私は彼に「あなたは決して賢い人間ではないですよ」と告げました。すると、彼とそこにいた人たちは一斉に私に対して憎しみの感情を向けてきました。しかし、私は本当のことを素直に述べただけなのです。

それではみなさん、なぜ私は彼が賢者でないと考えたと思いますか。その答えは次のとおりです。確かに彼は、政治的なことをはじめとして多くの知識を持っていました。しかし、私も同じなのですが、彼は善とか美については、それがどのようなものであるのかを答える力は持ち合わせていませんでした。それなのに、彼はこれらのことについて

も自分は知っていると思いこんでいました。ところがそれに対し、私は善や美とはいかなるものであるかを何も知らず、何一つ答えることができないことをしっかりと自覚しています。つまり、私は自分が何も知らない人間であるということをよく知っているのです。ほんのわずかですが、自分が無知な人間であることを知っている分だけ、自分の無知を自覚していない彼よりも知恵があると言えるのではないかということです。それに気がついていないということは、彼は私より賢くないということなのです。

それからというもの私は、この政治家以外にも多くの人々から賢者であると言われている人のもとを訪ね歩きました。しかし、その結果はすべてこれと同じでした。そのようなことを繰り返したために、私は多くの人々に憎しみの目で見られるようになりました。それでも私は、神のお告げを確かめるために、それからもそれ以外の多くの識者（しきしゃ）・賢者のもとを訪ね続けました。しかし、どこへ行っても「あなたは決して賢くはないですよ」と同じ事を言わなければならなかったのです。そのため、私はさらに多くの人々に憎まれるようになっていったのです。

さらに私は、すばらしい技術を持っていると言われている職人のもとも訪ねてみましたが、やはり結果は同じでした。彼も、その道では彼よりすぐれているという人がいないほど、その技能はすばらしいものでした。ただそれゆえに、彼は自分がすべてにおいてすぐれていると、間違った考えを持っていたのです。

私は彼らのようにうぬぼれた、自分が何も知らないということに気づかない人間にはなりたくありません。自分の無知を自覚しているひかえめで素直な人間であり続けたいと思いました。

このようなことを続けた結果、ソクラテスは賢者であるという評判が広まりましたが、一方で私を非難し攻撃する多くの敵も生み出したのです。そのような状況になったのも、私が彼らに無知を知らせるとき、自分は賢い人間であると言わざるをえなかったからです。おそらく、このことが人々の反感をかったのだと思います。

ただ、自分が賢い人間であると言ったのはあくまでたとえ話であり、人間の中に賢者などいないことは私にもよく分かっています。神のみが知恵を持っているのであってわれわれ人間の持っている知識などはそれに比べればないにも等しいものです。神はそのことを「人間の中における賢者とは、自分が無知であると自覚しているソクラテスのような人間である」という言い方で示したのだと思います。

私はこの神託を受けとってしまったがゆえに、賢者といわれている人を見つければ彼らと議論を行い、彼らが誤った考えを持っていると分かったならば、決して許すことなく彼らを正していかなければならないという使命を背負ったのです。このような活動をすることが神から神託を受けた者である私の責任だと考えています。それゆえ、私は仕事をすることもできずこのような貧しい生活を続けているのです。

ところで、暇をもてあましている金持ちの市民の息子たちが私のこの行動を見聞きし、私をまねて賢者と呼ばれる人々をつかまえては議論をするようになったそうですね。彼らはそのことを通して、自分では何でも知っていると思いながら真理については何も知らない人たちがいかに多いかを知るようになったとのことです。私はとてもいいことだと思っています。

ところが、そこで若者たちに問いただされた人々は恥をかかせられたとして、そのは

らいせを「ソクラテスは青年たちを腐敗（ふはい）させている」と言って私に向けるようになったのです。当然その訴えは、何の根拠もないものですので、彼らにその理由を問いただしても何も答えられませんでした。そこで彼らは、さらに、哲学者に対する一般的な非難（ひなん）である「ソクラテスは神を信じてはならないと言い、善いことをまげて悪いことだと言って人をだます」という新たな訴えを持ち出したのです。彼らは自分達の無知がみんなに知れ渡ったことを隠したいし、そのことに対して何らかの仕返しをしたいのです。そしてこのような人々がどんどん多くなってきたのです。今ここで私を訴えている３人の人々もそうです。彼らは実は、賢者と呼ばれるような有名な方々なのです。

以上がこのたびの私に対する訴えが生じたいきさつです。この状況を理解してもらうことが、私の弁明となるはずです。これこそが隠すことのない真実そのものです。これ以上申し上げることはありません。以上が昔から言われ続けてきた訴えについての弁明です。

次にもう一つの最近の訴えに対しての弁明に移りましょう。その訴えとは次のようなものです。「ソクラテスは青年を腐敗させ、国家が信ずるべきだと決めた神ではなく、全く違う新しい別の神を信じるように人々を仕向（しむ）けた」というものです。このことについては、ここに訴えた人を呼んできていますので、彼にいろいろと質問してみようと思います。それでは始めます。

（ソクラテス）

「私を訴えたメレトス君、ここに出てきなさい。君が私を訴えたことについて、今から議論しよう。それでは聞いてみるが、君が最も大事だと考えていることは、青年が良い人間となることだね」

（メレトス）

「その通りだ」

（ソクラテス）

「それでは、若者を良い方向へと導くものとは何なのか答えなさい」

（メレトス）

「国の法律だ」

（ソクラテス）

「それではその国の法律をよく理解し、若者を良い方向に導くのは誰なのか」

（メレトス）

「今ここにいる裁判官たちだ」

（ソクラテス）

「裁判官全員がそうなのか」

（メレトス）

「もちろんそのとおりだ」

（ソクラテス）

「それならここにいる多くの一般の人々はどうなのか」

（メレトス）

「彼らもそうだ。若者を良い方向に導く」

（ソクラテス）
「それなら政治家はどうなのか」
（メレトス）
「彼らも当然、若者を良い方向に導く」
（ソクラテス）
「国会議員もそうなのか」
（メレトス）
「そうだ」
（ソクラテス）
「それなら、君はアテネのすべての人は若者を良い方向に導くが、私ソクラテスだけが彼らを悪の方向に導いているというのかい」
（メレトス）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「君の言うところによれば、私はほんとうにみじめな人間なのだな。しかし考えてみてくれよ。回りを見渡したら、馬をしつけることのできる人間はわずかで、ほとんどの人ができないのではないかな。多くの人が馬をしつけることができて、ただ一人の人間だけができないというようなことがあるであろうか。確かに、青年を腐敗させる者がただ一人で、あとのすべての人間は青年を良い方向に導くならこれほどいいことはないと思う。しかし、そんなことがあるはずがないではないか。さらに君に聞いてみよう。一緒に住むなら良いことを自分にもたらしてくれる善人と、悪い事をもたらす悪人のどちらがいいかい」
（メレトス）
「わかりきっている。善人だ」
（ソクラテス）
「まわりから利益よりも、害がもたらされることを求める人がいるだろうか」
（メレトス）
「いないに決まっている」
（ソクラテス）
「ところで君は、私が青年を故意（こい）に悪に導いているとして訴えているのか、それともそのつもりはないが知らないうちに悪に導いているというのかい」
（メレトス）
「私は故意だと主張する」
（ソクラテス）
「驚いたね。わたしが隣人に悪をおよぼせば、悪でもって返されることを知らないとでもいうのかい。私がそんな愚（おろ）かなことをするはずがないではないか。そのうえ君は私がその悪いことを故意にしているとまで言っている。少なくとも私は、故意に若者を腐敗（ふはい）させてなどいないことはここで誓って言える。もし私の行為が私の思いに反して若者を悪に導いているとしたら、君は私にそのように告げれば私は素直に改めたはずである。なぜわざわざここに呼び出し、処罰を与えようとしなければならない

のか、私にはその行動の意味が分からない。さらに君は、私がわが国の認める神を認めないで、他の新しい神を信ずるように若者に諭（さと）し、彼らを惑（まど）わせているとも言っているのだね」
（メレトス）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「それなら君に聞くが、君は、私が神を信じているが、わが国が信ずるべきだとした神以外を信じるように若者に説いているというのかい。それとも、私は全くの無神論者であり、かつわが国が信ずるべきだとした神以外を信じるように若者に説いているというのかい。いったいどちらなのだ」
（メレトス）
「ソクラテスは、無神論者だ」
（ソクラテス）
「え、君は私がわが国の神を信じていないとでもいうのかい」
（メレトス）
「あなたはわが国の神を石や土と変わらないと思っているし、そのように言っている」
（ソクラテス）
「神に誓ってそう言いきるのか」
（メレトス）
「神に誓ってソクラテスは神を信じない人間だと断言する」
（ソクラテス）
「みなさん、彼の言っていることは全くつじつまの合わないことに気がついてください。まさに彼は、ソクラテスは神を信じ、神を信じないがゆえに罪があるのだと言っているのと同じことなのですよ。たとえば、この世に馬に関することの存在は信じるが、馬の存在は信じないという人がいるでしょうか。また、笛をふく技術が存在することは信じているが、笛吹きがいることを信じない人がいるでしょうか。いるはずがありません。同じように神のはたらきは信じているが神の存在を信じないというような人がいるでしょうか。メレトス君、答えてみたまえ」
（メレトス）
「そんな人は、一人たりともいない」
（ソクラテス）
「たしか君は私が神のはたらきを信じ、それを若者に教えていると訴えに書いているね。私が神のはたらきを信じるなら、神の存在を信じるということになるのではないかな」

（メレトス）
「そのとうりだ」
（ソクラテス）
「私自身が神の存在を信じているということを自らが言っているのにこんな訴えを起こすなんて、何か違う目的があって私を罪人にしようとしているとしか考えられないよ」

アテネのみなさん、私になんら悪いところがないことがお分かりいただけたであろうと思います。しかし、私に対する敵意が人々の間にいまだに多く存在しているのもまた事実です。もし私を滅ぼすものがあるとしたら、過去の多くの善人がそうであったように、それは訴え者ではなく、みなさん大衆の悪口や疑いの心です。みなさんは、なぜソクラテスはそこまでして、人々に無知を気づかせようとするのかと問われるかも知れません。

その答えは次のとおりです。昔から、英雄と呼ばれてきた人々は、自分の死も恐れず正義を貫（つらぬ）いてきました。私もこれが正しい行いであるからこそ、自分の危険をかえりみずにそれを行うのです。私は恥をかいて生きるぐらいなら、死んだほうがましだと考えます。私が今この場を死の恐怖のゆえに逃げ出したとしたら、それは物笑いの種になることであろうと思います。もし、そのような行動を私がしたとしたらどうぞこの法廷で、いかにも賢人面（けんじんづら）はしているが死を恐れ、神や神のお告げを信じない者として私を裁（さば）いてくださって結構です。

そもそも死とはそれほど恐ろしいものなのでしょうか。死については誰もどのようなものであるか知らないはずです。それをあたかも知っているかのように恐れるのは、まさにそれこそ賢人でもないのに賢人ぶっていることと同じことではないかと思います。

ところで、もし仮に今回、あなたがたが私を無罪にしたとしても、私は決してこれからもあなたがたに無知を自覚させるという神から与えられたこの仕事をやめるつもりはありませんよ。私は自分の命の続く限りあなたがたを問いただすことをやめることはないでしょう。「名誉や財産を得ることだけを追い求め、知恵や真理に向かって自分の心をより良いものにすることになまけていることを恥ずかしいとは思わないのですか」と、私はみなさんに言い続けます。たとえ、「そんなことは、分かっている」と言われても私はあなたがたにそのことを言い続け、それに納得し正しい行動ができるまで徹底的に問いただしていきます。そしてその結果、その人が賢者などではないと分かったら、あなたは善いものを価値がないと言い、価値のないものを価値あるものだとする間違った人間であるとして非難します。誰に対しても私はこの態度を貫きます。

しかしそのことは、あなたがたにとって自分が賢くないことを悟るということで、実はあなたがたが幸福になることなのですよ。

ともかく私がみなさんに言いたいことは、お金や富ではなく精神を最高の状態にすることに気を使うこと、また富から徳が生まれるのではなく、徳から富が生まれるということをしっかりと肝（きも）に銘（めい）じるべきだということです。あなたがたが私をどう裁（さば）こうとかまいません。ただ私は、たとえどのような裁きを受けようとも、自分が行うべきだと考えることは続けていきます。

さらに、もう少し言いたいことがあります。反感を持たれるかも知れませんがどうか騒がすに最後まで聞いてください。私を死刑に処するということは、あなたがたが自分自身に自分で害を与えるようになるということを忘れないで下さい。正義に反して私のような善人を死刑に処することは、あなたがたに多いなる災（わざわ）いを招くことになると思います。私がこの場で弁明するのは自分の命ごいのためではありません。あなたがたが、神から与えられたソクラテスという宝物を死刑に処するような愚（おろ）か

な過ちを犯さないためなのです。私を死刑にしたら、あなた方を目覚めさせるような立派な人間を再び見つけ出すことは困難になると思います。あなたがたは、私を大事にし、かつ愛さねばならないのです。なぜなら、私は神から使わされた人間だからです。私は今まで自分のことは一切投げ打って、あなたがたを目覚めさせることに奔走（ほんそう）してきました。報酬などは一切受け取っていません。私が貧乏なのが何よりの証拠です。

ところで、そこまで人々を良い方向に向かわせたいのなら、なぜお前は政治家になって、この国およびこの国の人々に尽くそうとしないのかと言われるかも知れません。しかし、それには理由があります。もし私が若くして政治家になっていたとしたら、もはや私はこの世に存在してはいないと思います。国家に対して行われる不正や不法に対して対抗しようとする者は、この国では生き続けていくことはできないのです。本当に正義のために戦おうとする者は、私人（しじん）でなければならず、公人（こうじん）となって生きてその職務（しょくむ）をまっとうすることは、きわめて困難なことなのです。

このことに関して私は、あなたがたに証拠を示すことができます。実は私はかつて一度だけ参議院議員になったことがあります。その時私はある事件に出会いました。議員のほとんどが違法（いほう）な決議に賛成をする中で、私は国の法律と正義に従うべきだと訴えて反対をしました。その時は、幸運にも何もなく済みましたが、もしこのようなことがもう一度あったら、私は命を失っていたであろうと思います。みなさん、私が政治に携（たずさ）わった身のままで、今のように正義を貫いた生き方をしてこのように生きながらえているということは、ありえないことなのです。政治家のような公職（こうしょく）につくということは、そういうことを意味するのです。

私は今まで、正義を貫くことに関しては誰に対しても自分の意見を変えたことはありません。また、いまだかつて私は誰の師にもなったこともありません。私の話を聞きたい人には誰にでも話をしてきました。さらに、そのことで私はお金を受け取ったことも一度たりともありません。また、私は人に頼まれてこれらのことを行っているわけではありません。自分の意思で、いや神の意思で行っているのです。

そのような活動によって今まで、賢者でもないのに賢いふりをしている人の多くが私に無知の正体をあばかれてきました。彼らのほかにも、私に若いときからいろいろな教えをうけた人間は多くいます。彼らのほとんどは、今や立派な大人になっているはずです。もしそれらの人々が当時の私の行動や教えに対して不満や怒りを覚えるなら、彼らも今ここに来て私を訴えているはずです。違いますか。仮に彼ら自身が訴えなくても、彼らの家族や友人が訴えるのではないかと思います。しかし、今ここにいるこのような人々で誰一人として私を訴えようとする人はいません。それどころか逆に私を応援しようとしていると聞きます。彼らの態度こそが、私に対して感謝の心を持ち、そのことをありがたく受け取っている証明ではありませんか。私を訴えているのは、恥をかかされたとして逆恨（さかうら）みしているほんの一部の賢者でもないのに賢いふりをしている人間だけなのです。

私の弁明はこれぐらいにしておきます。あなたがたは、私よりはるかに軽い罪の人間が人々の同情をひくために、この場で涙を流し無罪判決をただひたすらお願いしているのを何度も目にしたことがあることと思います。ところが、私の態度にそのようなもの

は全くなく、あなたがたにとって私はふてぶてしく見えて不愉快（ふゆかい）にさえ感じるかも知れません。もしかしたら、あなたがたの中には私に自尊（じそん）心を傷つけられたという人もいるかもしれません。

しかし、その怒りによって投票しないでほしいのです。私だって三人の子供のいる父親です。もちろん、その子供たちをここに連れてきてみなさんの同情を引こうとは一切思ってはいません。しかし、誤解（ごかい）しないで下さい。それは私が決して高慢（こうまん）な人間であるからではありません。それは、知恵あるものとしとてそれなりの評価を得てきたソクラテスという人間が、ただ死を恐れて正義を貫かなかったとなればこんな恥ずかしいことはないからなのです。今まで私は、相当に名声のある人がここに立つやいなや自分の考えを変え、ただひたすら命ごいをする姿を何度も見てきました。しかし、私はいやしくも少しばかりとはいえ名声を手にした人間です。そのようなことはすべきではないと考えます。もし、そのようなまるで芝居のようなことを私がここでしたとしたら、どうぞ厳罰に処（しょ）してください。ともかく私は、裁判官の同情心に訴えて刑を軽くしてもらおうとすることは誤りであると考え、そのようなことをする気持ちは全くありません。みなさんどうぞ公正に判断してください。賢明なみなさんにすべてをまかせます。

２　裁判を終えて

あなたがたが私を有罪にしたことに対して、私は驚いてなどいません。むしろ、有罪と無罪の投票の差がこんなにも小さかったことに驚いているくらいです。訴えた人々は私を死刑にすることを要求していますが、私は刑罰などを受けるような悪いことをしてきた人間ではなく、むしろ感謝されるべき人間だと思います。たとえば食事によってもてなされることのほうが適しているのではないでしょうか。このようなことを言っていると、あなたがたは私がまたもやおごり高ぶった傲慢（ごうまん）な人間だと思われるかも知れませんね。

しかし、私は決してそのような人間ではありません。じっくりと話し合う時間が持てれば、私という人間を分かってもらえるはずだと思います。しかし、残念ながらこの裁判は短時間で結論を出さなければならないことになっています。あなたがたは、このうるさい私を国外に追放しようと思っているのかも知れません。しかしそのようなことをしたなら、アテネの人々さえ嫌がっていることを他国の人々が経験しなければならないことになるのではありませんか。ただ、私としては、また新しい地で方々を歩き回り、そこで若者をつかまえては、問いただしたりできるので、追放の刑罰もけっして悪くはないかなとも思います。

あなたがたの中には、ソクラテスよ、もうここらへんで退（しりぞ）いて静かに暮らしたらどうかと言いたい人もいるかも知れません。しかし、私のこの活動は、神から与えられた命令ですので続けなければならないのです。それと、仮に罰金を科せられても私には支払うお金がないことはここで申し上げておきます。

みなさんは我慢（がまん）が足りないなと思います。あえて今ここで私を死刑にしなくても、この老いぼれはまもなくすれば死んでいくのです。私に死刑の投票をした人は、お前は死刑を免（まぬが）れるためにもっといろいろなことを言えばよかったのではないかと思っているのかもしれません。私に足らなかったものは、泣きわめいて許しを願いでる姿だったのでしょうか。いいえ、私にはそんなことをする気は全くありません。戦場であろうと法廷であろうと死を免れようとすれば、ぶざまではあるがその方法はいくらでもあることは分かっています。死を免れることは簡単ですが、正しいことを貫くことは困難です。私はいさぎよく死の判決を受けます。

私を有罪としたみなさんに今後のことを予言しておきましょう。特に死期のせまった私の予言には特別な重みがあるはずだと思います。私を死刑にすれば、もうあなたがたを問いただす人間はいなくなるとでも思っているのでしょうか。いや違います。問いただしていく人はさらに増えていきます。実は、今まで私が彼らの動きを抑えていたのです。あなたがたは自分に対する非難から逃れるのではなく、進んで自分を改めるように

しなければならないのです。

私に無罪の投票をしてくれた人たちにも、今ここでお話をしておきたいと思います。実は私の身にはこのところ不思議なことが起こっていたのです。それは神からの警告（けいこく）のことなのです。神からの警告は、私がなにか良くないことをしようとした時、いつも私に聞こえてくるものです。ところが、私が死を宣告されたというこの時であるのにもかかわらず、神からのお告げは今のところ何一つありません。ということは、私にとってこのことは良いことなのだという意味だと思います。つまり、死とは人間にとって幸福なことであるということなのに違いありません。仮に死が全くの無になることであるとしたら、まさに何の夢も見ない熟睡（じゅくすい）であり、これほどすばらしいものはないと考えます。永遠といえども一夜とそんなに変わるものではないと思います。また仮に死が、次の段階への階段ならこれもまたすばらしいものであると思えます。あの世で多くの過去の偉い人に出会えるでしょう。そして、そこでも多くの人々に無知を知らせる活動ができるでしょう。多くの人々に問いかけができることが楽しみです。そしてそのうえそこは、もはや死のない世界ですので、二度と死刑にされることもないであろうと思われます。

私に対するこの死刑判決は、たぶん死んでこの苦しみから逃れなさいという意味であろうと考えます。それゆえに神は私に何の警告もしなかったのだと思います。

最後にみなさんにお願いがあります。私の息子たちが成人して、徳よりも名声やお金を大事にする生活をしていたらどうぞしかってやってください。それでこそ、私と息子たちは、あなたがたから正当な取り扱いを受けたことになります。私にはもう去るべきときがきました。

ソクラテスの弁明［簡易版］

翻　訳　　大庭好喜

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社